

新田梢(植物生態学)・片平浩孝(環境生物学)・高田久美子(気候システム学)

研究の背景

近年の重要な環境課題の一つに、「生物多様性」の喪失があります。2030年までに地球の陸と海の30%を保全する目標「30by30」が設定され、「OECM」(保護地域以外で生物多様性保全に資する地域)として、緑地や里山など地域の自然の保全が期待されています。

特に、地域の緑地は、希少な動植物の逃避地となり、自然を身近に感じられる憩いの場所として利用されてきました。一方、その重要性が十分に把握されないまま開発が進んだり、適切な管理がされずに放置されたりして、出現種数の減少や外来種侵入など、様々な問題がおこっています。



アプローチ

主に、大学近郊(神奈川県や東京都)に残る緑地で、いつ・どこに・何が生えているか、定期的に植物調査を行います。2021と2022年度のプロジェクトでは、NPO法人の協力のもと、市民の努力によって保全されている相模原市の緑地で植物調査を行い、冬から春にかけて劇的に変化する林床の植物相を記録しました。

フィールドワークとデータ解析から、植物相の把握や多様性評価を実施し、緑地管理へのフィードバックを目指します。時期や興味に応じて、植物以外の生物調査や遺伝子解析なども行う場合があります。地形や気候との関係など、地域の生物多様性の価値について総合的に検討します。

期待される結果

◆地域の緑地の豊かな植物相の再発見

意外なことに、地域の植物については未だに把握されていない部分もあります。また、植物相も年々変化していくため、記録することが重要になってきます。

◆地域の生物多様性の価値を総合的に評価

地域の自然を保全する計画が国や自治体でも進められています。生物多様性の価値を評価することで、このような計画に関連する基礎情報を得ることができます。



募集方法

募集人数は3名程度です。興味を持った方は説明会に参加(または視聴)し、参加を希望する方は応募してください。個別やメールでの質問も随時受け付けます。

学生のみなさんは、野外でのフィールドワークを通して、基礎的な調査技術、植物を中心とした野生生物・自然環境の基礎知識などを習得していきます。野外での調査に興味がある皆さんの参加をお待ちしています。